

# 松枝寅男先生を送る

金 森 恒 利

松枝寅男先生は、昭和53年4月1日をもって香川大学経済学部を停年退職され、本学での30年の長期に亘る教壇生活に別れを告げられた。先生のご紹介で私が本学に赴任したのは、昭和30年の早春であった。いま、筆を執るに当たって往事を想えば、幾多の感慨が胸中に去来して、惜別の情切なるを禁じえない。

先生には、大正3年5月、神戸市に生を受けられ、その後京都帝国大学経済学部、同文学部哲学科および同大学院（理論経済学研究）において研究の後、昭和19年4月同志社経済専門学校教授の職を経て、23年2月本学の前身である高松経済専門学校に教授として就任された。それは高松へ復帰前の善通寺仮校舎時代のことである。翌24年、学制改革による香川大学経済学部の発足に伴い、同年7月香川大学助教授、26年4月同教授となられ、爾来ご退職の日まで、一貫して経済原論を担当されると同時に中頃までは経済学史をも担当されるなど、ひたすら研究と教育に専念してこられた。特に、先生は非常な熱意と愛情をもって学生の教育と指導に全力を尽され、人材の育成において余人の及ばぬ成果をあげられた。

先生の経済原論のご講義は、格調高く、個性の強いユニークな名講義として、学生間の評判であった。量よりも学生の理解を第一とされ、毎時間前回の講義の内容を要約されつつ懇切丁寧に近代経済理論の真髄を説かれたと聞く。また、教室での学生のマナーについても厳格なことで有名でもあった。このようなユニークな教授が、次第に学園を去ってゆかれるのも心淋しい限りである。また、先生は学生の研究会活動にも尽力され、現在の理論経済学研究会の発展の基礎をつくられた。

高田保馬博士に師事された先生は、利子論と限界生産力説の検討をもって研究活動を開始され、分配理論の研究を生涯のテーマとされていた。しかし、一

方では田辺元博士にも師事された先生は、哲学への郷愁もすて難く、常に経済理論と哲学の間を往来されていたように思われた。しかも、近年先生の関心はますます宗教、殊に仏教の研究に傾斜してゆかれたようであった。先生は、かつて「金森君、華嚴經の世界は一般均衡だよ」と語られたことがあったが、なぜか門外漢の私にも忘れられない話題であった。また、経済学史の研究では、特に、ケネーの学説に強い関心を持たれていたようである。先生は何事にも徹底を期される場所が見受けられ、学問的視野は広く、研究態度は極めて慎重であった。そのためか、研究成果発表の機会を失われたのは惜しまれる。

先生は、また大学運営についても、評議委員、予算委員、図書館委員等の学内委員として、大学の充実と発展のために献身された。特に、大学発足に際しては種々尽力され、学部発展の基礎を築かれ、また数理経済学の講座の開設をはじめ学部運営についても大きく寄与された。

さらに、学外では、香川県経済再建整備委員、香川県薬事審議会委員、香川地方最低賃金審議会会長、香川県収用委員会委員の職をも兼ねられ、香川県の地方行政に参画されるなど、地域社会の発展のためにも多大の貢献をされた。

この30年の長期に亘る学内外での顕著なご功績により、先生はご退職に際して、香川大学名誉教授の称号を受けられた。われわれもまた、このご退職記念号の誌上をかりて、先生の長年のご苦勞に対して心から感謝の意を表わすと共に今後も本学の発展のためにご指導とご鞭撻をお願いする次第である。

自己を律すること極めて厳しく、強き信念の人であった先生には、一面秋霜烈日の風格があったが、他面では非常に温い寛容と理解をわれわれに示された。殊に、同門の後輩として、私はいつしか先生の寛容に甘えていたのではないかと反省さされる昨今である。

去る4月8日、先生は愛された校庭の満開の桜花を後ろに、経済学部玄関を静かに去って行かれた。そして若き日の想い出の地、京都は洛北、岩倉の里に新居を構えられたと伺っている。どうか、今後ますますご健康に留意され、ご家族共にいつまでもご多幸に過ぎせんことを心から祈念する次第である。